

烏梅

叶匠寿庵

2021年夏 Vol.37



「酔芙蓉」

表紙絵作品

すいふよう
「酔芙蓉」

かわもとまりこ

河本万里子

日本画家。1975年、滋賀県高島市生まれ。

嵯峨美術短期大学（現 嵯峨美術大学）日本画専攻科修了。

江戸時代の円山応挙より京都の画壇に受け継がれてきた『写意（写生を通して物事の本質をとらえる）』の伝統に学び、生命のもつ瑞々しさを四季折々の植物を通して描く。京都嵯峨美術大学非常勤講師を経て、現在大阪にて作家活動中。京都日本画家協会会員。

2003 平和堂財団芸術奨励賞

2005 青垣 日本画展 京都新聞社賞受賞

2006 前田青邨記念大賞展

2009 京都 日本画新展

2013 在マルセイユ日本国総領事館 - マルセイユ市 企画展 Parc Borély (France)

2015 叶匠寿庵 寿長生の郷にて広報誌『烏梅』表紙絵原画展 / 河本万里子日本画展 (同'18)

2016 第4回郷さくら美術館桜花賞展 桜花賞大賞受賞 郷さくら美術館東京

2017 河本万里子日本画展 - 春ノ譜 - 京都寺町 Art Space-MEISEI

2019 京都 日本画新展 in 二条城 -100人の画家・嵯峨野線を旅して-

大丸心斎橋店 美術画廊にて個展

2020 日本企画画展《春興》京都寺町 Art Space-MEISEI

2021 大丸京都店 アートサロン ESPACE KYOTO にて個展

他 大覚寺蓮華殿 天井絵「花曼荼羅」、伏見稲荷大社 本宮祭行灯画奉納。

烏梅(うめ)

近江も多く詠まれている『万葉集』。万葉仮名では梅を「烏梅」と表記されています。
近江の歴史と寿長生の郷(すないのさと)の梅林を重ね合わせタイトルとしました。

『烏梅』第37号2021年夏

発行日 2021年6月1日

発行所 株式会社 叶匠寿庵

発行人 芝田冬樹

編集人 池田典子

印刷所 佐川印刷株式会社

表紙・絵 河本万里子

株式会社 叶匠寿庵

本社・工場

〒520-2266

滋賀県大津市大石龍門4丁目2番1号

TEL 0120-257310(土日祝休業)

FAX 077-546-3133

HP <https://kanou.com>

『烏梅』は季刊誌として定期発行致します
定期購読お申し込み・スイートメモリー
詳細については左記、もしくはお電話にて
<https://kanou.com/gnaviplus/magazine>





クチベニマイマイ | 撮影：田中知香

それは何かを試すように私たちに身を任せ、永い時をやり過ごしている

この先いつ終わりが来るとも知らず、或いは終わりなど永遠に來ないかもしれない

果てしない存在の中で限られた時を過ごす私たちは時折その美しさを知り、畏れ、その一部であることを思い出す

ひとつひとつが繋がり、紡いでいくこの物語は

その先で見知らぬ誰かの心を打ち、救い、

また新たな物語に姿を変えるだろう

その時、全てはどんな形をしているのだろうか

たなかちか
田中知香
平和堂石山店

近江の台所《その35》

弥平とうがらし

おかだちほ
岡田千穂

商品部商品課

湖南市下田、明治以前よりナスの栽培が盛んで、記念すべき「近江の台所《その1》」の食材「下田なす」のブランド名で知られる。今回取り上げるのは同地で100年以上栽培の続く伝統野菜「弥平とうがらし」。他にはない可愛らしいオレンジ色、食べると激辛というギャップの効いた食材だ。その辛さは鷹の爪の2倍。しかし11・5度と糖度は高く、辛味の中に感じるほのかな甘みと爽やかな香りが絶妙な旨味を生み出す。地元ではナスと一緒に漬物にすることがほとんどで、その分だけを各家庭畑の端っこや庭先に作るものだという。こんなに面白い食



弥平とうがらしを使った商品
| 撮影：岡田千穂

材だが、下田の人々にとっては生活に根付いたそれが特別だという意識はなく市場に出回ることにはなかった。

そんな弥平とうがらしがここ10年で特産品として広く知られつつある。一役買ったのが取材をお願いした株式会社エフエムクラック。2011年に設立、弥平とうがらしを使ったオリジナル商品を販売している。10年目となる今年1月には設立者の三峰教代さんと佐々木由珠さんから、地域おこし協力隊員として湖南市に來ていた釘田和加子さんに事業を継承し新しいスタートを切った。今回は新旧3人の代表からお話を伺うことができた。

前代表のお2人の出会いは県の職業訓練校、農業を学ぶアグリ・ファーム科。それぞれ東京・大阪と都会でのOL経験を経て、30歳を目前に働き方や生き方に悶々とした気持ちを抱え帰郷という共通の境遇。初めは接点がなかったというが最後の最後で意気投合。やるからには農業での起業を決めた。初めは三峰さんの地元湖南市で下田なすを作り始めたが、その時に師匠と呼ぶ谷村護さんから「一緒に植えとき」と渡されたのが弥平とうがらし。これがまさに運命の野菜だった。初年度、ナスの栽培・販売ともに好調で忙しく夏を過ごした。10月に収穫の時期を終えて気づいたこと、「あ、終わるんや」生で販売するだけでは単価や限られた収穫期という面で限界があった。そんな時に畑の端っこで見つけたのがオレングシ色の唐辛子。何を植えたかも忘れていたというそれは元気に育ち、食べると激辛。乾燥させれば加工品として可能性があるので、と2年目から本格的に栽培を始めた。

目指す農業には初めから「加工」という課題があった。自分たちの理想とするライフスタイルを叶えるための農業。働く時は働き、休む時は目一杯休む、メリハリのあ

る生き方をしたい、と話す三峰さん。そういう面でも弥平とうがらしはぴったりだったという。放っておいてもある程度育つという強い唐辛子だが、誰もしたことのない大量栽培はうまくいくことばかりではなかった。特にトラウマ級だと話すのが青枯病というナス科の病気での全滅。師匠や先輩農家さんに助けていただいたこともあった。周りの助けがなければ継続できなかったと佐々木さんは話すが、それもやりたいを追求する気持ちの強さと人を惹きつける性格あつてのことだと、笑顔の絶えない取材中に強く感じた。

10年の紆余曲折を経て、事業は好調だったが、ライフステージの変化に伴い滋賀にすることが叶わなくなったお2人。廃業も考えたという。そんな時、事業を引き継いでもらえないかと浮かんできたのが、佐々木さんの産休中に手伝いに来てくれていた釘田さんだった。地域おこし協力隊では起業のサポートをするコーディネーター役の彼女にとって事業を手がけることはチャンスとも言えたが、簡単なことではない。承諾したのは何よりお2人の想いと弥平とうがらし自体の面白さに魅かれたからだ。

現在唐辛子の生産は下田地区内の農家に委託、会社は



左 弥平とうがらし | 提供：株式会社fm craic
右 集合写真(左から前代表三峰敦代さん、現代表釘田和加子さん、前代表中村由珠さんと中村叶子ちゃん)
| 撮影：酒井綾子

株式会社fm craic
●住 所 滋賀県湖南市高松町1-2
●電話番号 0748-75-8810
●F A X 0748-75-8820

加工と販売をメインとしている。引き継いだ釘田さんには迷惑なほど手作り、と前代表。製造から瓶詰めまで機械に頼ることはほとんどない。収穫した唐辛子はヘタをとり、洗って乾燥させるが、欠かせないのが目視でのチェック。加工するからといって手は抜けない。

3人が声を揃えて「一番よく使う!」というのがホットチリソース。唯一生の唐辛子を使用、辛いのはもちろん野菜本来の甘みも感じやすい。ピザやグラタン、餃子にお好み焼きにおでん、何にでもよく合うこのソース、確かに瓶の底を見るまで時間はかからなさそうだ。一番人気の一味「ぴりり」に加えて季節限定の「柚子ぴりり」など楽しいラインナップ。女性目線で作られた商品はどれも使いやすいに長けている。4年間インドで生活していたというほどインド好きの釘田さんは今後の商品開発は「インドに振るかも……」と話す。まだ前代表に頼ってばかりだが、柔軟で型にはまらないエフエムクラックススタイルは確かに引き継がれているように見えた。開発者であると同時にファンでもあるお2人は新商品も楽しみにしているという。更なる可能性を秘めたオレングシ色の実が今年も下田の夏を彩るだろう。

グリンティーのガリガリ

南浦 邦子

小学校ランチモニター※

祖父母は奈良県大和高田市で能勢園という小さなお茶屋を営んでいた。私と姉は学校が休みになると、祖父母宅にしばらくお泊まりするのが恒例だった。祖母は古いお茶箱がずらりと並ぶ店先で、錆びた天秤に手をかけて煎りたての香ばしいお茶の葉を袋に計り入れ、トントンと底を落として形を整えて、ひん曲がった親指でキュッと手早く茶色の紐をかけるのだった。私たちも時々袋詰めを手伝ったり、銘柄のシールを袋に貼ったり、色あせた黄色い値札をマジックで新しく書き換えたりした。彼女はよくお客さん用のカウンターに招いて、静かに抹茶を点ててくれた。お店ではグリンティーという抹茶に砂糖を混ぜたものを販売していた。水やお湯、牛乳で溶いて気軽に飲める抹茶飲料だ。幼い舌には上質のお抹茶よりもはるかに美味しく感じられたのは言うまでもない。夏になると、水に溶かしたグリンティーを製氷機で凍らせて、食べさせてくれた。氷だからガリガリと噛み砕いて食べる。

「グリンティーのガリガリ食べたい」

何度頼んだであろう。私たちだけの懐かしいひやつこい思い出だ。建物も古くなり、ついに昨年能勢園は取り壊しになったと聞いた。遠いカナダにいる今、思い出の場所を失った実感は全くない。大好きなおばあちゃんが今もガリガリを作って待っていてくれるような気がする。

みなみうらくにこ

1976年、滋賀県に生まれる。カナダ・ハリファックス在住。自然、冒険、美味しいものが大好き。大切にしているのは人との出会いとつながり。テラスにやって来る赤リスと小鳥の観察、リンゴの栽培が日々の楽しみ。

※昼食及び休み時間監視員 / 指導員

※このページへの投稿を募集しています。投稿につきましては、裏表紙をご覧ください。

近江の街道史話《その5》

中山道醒井宿の名所・三水四石にまつわる伝説

やすぎじゅん

八杉 淳

草津市立草津宿街道交流館長

中山道、江戸から数えて61番目の宿場・醒井宿(米原市)は、『大乘院記録』応仁2年(1468)に京都から鎌倉へ至る宿駅として「佐目伽井」とあり、中世からの宿駅として機能していた。この醒井宿、今も日本武尊ゆかりの泉・居醒の清水を水源とする地蔵川が宿内を流れ、川中に梅花藻が繁茂する清流の宿場として多くの人が訪れている。歌川広重の描く「木曾海道六拾九次之内 醒か井」の浮世絵では、宿場西はずれの長閑な街道風景を



『木曾海道六拾九次之内 醒か井』| 国立国会図書館デジタルアーカイブ

描く。京から中山道を往く旅人は、ここから東に進むと、清流地蔵川に沿って家並みが続く醒井宿へと入る。

さて、宿内にある居醒の清水は、『古事記』によると、日本武尊が伊吹山の荒神退治に出かけた際、牛のように大きな白猪に化けた山の荒神が氷雨を降らせたため、日本武尊は高熱で正気を失ったが、やっとのことで山を下り、清水で体を冷やして正気を取り戻したことにちなんだといわれている。『日本書紀』でも、白猪が大蛇に代わっているものの、その由緒の記述には大差はない。『古事記』『日本書紀』にある清水は、この醒井以外にも柏原宿(米原市)東の白清水、伊吹山麓の大清水、関ヶ原町玉などに比定する説もある。

また、醒井宿には「三水四石」の名所があり、それぞれに言い伝えが残る。江戸時代の中山道の名所旧跡、名物名産などを紹介した挿絵入りのガイドブック『木曾路名所図会』や、近江の名所を紹介した『近江名所図会』に、居醒の清水・十王水・西行水の三水と、日本武尊腰掛石・日本武尊鞍掛石・蟹石・影向石の四石が取り上げられている。影向石は、醒井の産土神である加茂神社の神霊が影向した石で、居醒の清水から少し西にあったとい

き」の歌がみえる。また、阿仏尼の『十六夜日記』には、建治3年(1277)10月18日、醒井を通り、「結ぶ手に濁る心を　すぎなば　憂世の夢や　醒が井ノ水」と、醒井の清水にちなんだ歌を詠んでいる。江戸時代の『近



上 居醒の清水

下 『近江名所図会』醒井部分 | 草津市立草津宿街道交流館蔵

われている。残りの三石はいずれも居醒の清水のなかにあって、先の日本武尊の伝説にちなむ由緒を持ち、日本武尊が腰掛けた石、馬の鞍を置いた石、そして蟹石は、雄略天皇の御代に勅使が美濃国本巢郡の霊泉から持ち帰ろうとした巨大な蟹に、水をやろうと放したところ、たちまち石になってしまったと伝えられている石である。

一方、三水のうち、居醒の清水のほか二水の由来について、十王水が平安時代に諸国遍歴をする高僧淨藏によって水源が開かれ、近くに十王堂があったことから、その名がついたとされる。西行水は、平安中期に仲算という僧が呪術によって湧き出させたといわれ、のちに清水の傍にあった茶店で西行法師が飲み残した茶の泡を茶店の娘が飲んだところ、男児を出産したという伝説により西行水といわれるようになったという。この話を聞いた西行は、もし男児がわが子であれば、元の泡へ帰れと念じたところ、その子はたちまち消えて泡になったという謂れから泡子塚と呼ばれている。

これら醒井宿に残る数々の伝説は、街道を往く旅人も知るところとなり、鎌倉時代の『東関紀行』には「道のべの木陰の清水　むすぶとて　暫し涼まぬ　旅人ぞな

江名所図会』は、「町中に流れありて至って清し。寒暑にも増減なし」と醒井宿を挿絵入りで紹介する。「日本武尊居醒清水」「十王水」「西行水」の三水と、日本武尊腰掛石、鞍掛石、蟹石、明神影向石の四石の記載もみえる。挿絵には、街道沿いに居醒の清水が、その右手には地蔵堂が描かれている。そして、街道を挟んで「醒井茶屋」があり、街道沿いの床几で休む旅人のすがたが描かれており、中山道を往く旅人の名所のひとつになっていた。宿内を流れる地蔵川は、宿の人びとの生活用水としても用いられ、流れに突き出た板橋の上で洗いものをする女性のすがたも描かれている。『近江名所図会』には居醒の清水の傍らに地蔵堂がみえる。これは慶長年間に大垣城主であった石川日向守家成が地蔵の霊験に感謝し、報恩のために建立したと伝えられる。堂内には、もと地蔵川の水中にあったとされ、「冷し地蔵」と呼ばれた270センチメートルもの大きな石地蔵が安置されている。

八杉淳

専攻は近世交通史。江戸時代の街道を歩きながら実践研究。現在、草津市立草津宿街道交流館長、兼史跡草津宿本陣館長。

すぎえしげひで
杉江重秀

営業部外販課

メンターという言葉をご存知だろうか。

指導者や助言者と訳される事が多く、私は心の師匠だと考えている。社会人になりたての頃、「頑張ってるんだけど、評価されない」と愚痴をこぼしていたら「相手の期待に応えてないのではないか。何を求められているのかを考えないとだめだ」とアドバイスをいただいた、地元の材木屋の社長。お酒を飲みながら叱咤激励された。

どの道をいくつか

人材派遣会社の営業職にと、転職のお話をいただいた時は悩んだ。良いイメージを持ってなかったからだ。そんな時、行きつけのうどん屋の大将が「君が持っている悪いイメージの営業マンにならないれば良いのではないか」と一言。なるほど！と思い、異業種で頑張る覚悟ができた。

この言葉を胸に、もっと素敵な派遣会社をつくりたいという思いだけで独立。この時に支えてくれた言葉はプロレスラーのアントニオ猪木氏の「二歩踏み出す勇氣」だった。私なりの解釈は「怖がらずに信じた道を進みなさい。踏み出さなければ何も始まらない」。

今はご縁があつて、叶匠壽庵の外販課で営業を任されている。配達業務では効率を上げるために近道を探し、新規営業では営業に近道なしと地道に挨拶回りに励んでいる。私のメンターに感謝。

ふるさと絵屏風(記憶絵)でつながる未来《その5》

受け継がれるべき記憶の物語

はやしりょう

林旅生

叶匠壽庵グループ有限会社芝田果径

かだゆきこ

嘉田由紀子

監修 環境社会学者、前滋賀県知事

昨年の春から始まった記憶絵づくりも下絵が完成し、いよいよ本紙に書き始めるところまで来た。ここまで来るとようやく自分が何を作ろうとしているのかわかってきたような気がする。

現在私は、グリーン部門・芝田果径で叶匠壽庵の本社、寿長生^{すなひ}の郷にて6万3千坪の土地の緑地整備や管理に携わっている。このプロジェクトに参加したのも昔の龍門の風景や暮らしを知り、記憶絵に残す中で何か得る

ものがあるのではないかと思ったからである。今号では如龍ガ滝について触れると共にこれまでの過程で私が感じたことや思ったことを記述したい。

10月中旬私たちはとある場所の調査にきていた。「ガタン、ゴトン。バキ」。頭をぶつけるくらい揺れとすぐ下が崖になっているという恐怖でゆっくりとしか走れない。しかし案内をしてくれている地元の猟師の辻元さんの車は容赦なく遠ざかっていき見えなくなる。おおよ



地元の子どもを交えての下絵づくり

ちの想いこそ記憶絵に残さなければいけないものなのだと感じた。

ふるさと絵屏風(記憶絵)とは不思議なものである。簡単に言ってしまうと昔の風景を絵に残すというだけのことなのだが、聞き取りや調査をしてるうちに様々な物語が蘇ってくる。

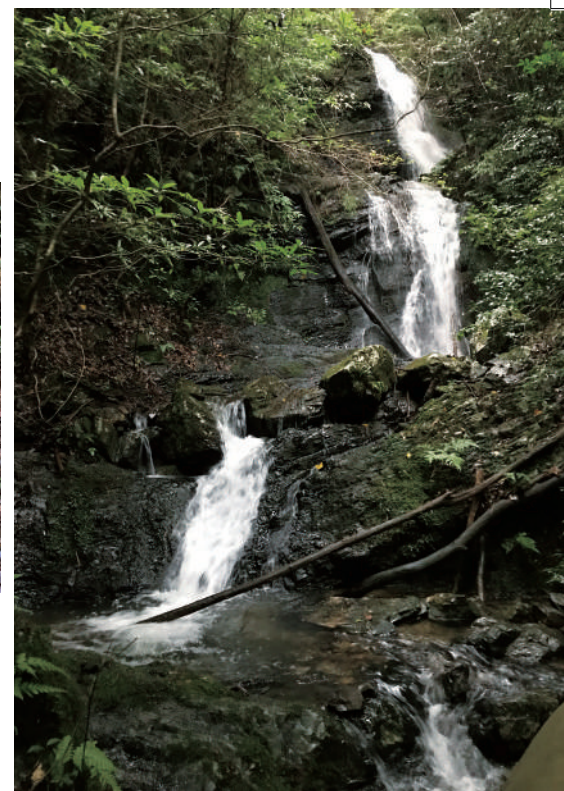
山を歩いての結婚式、学校終わりの牛の世話。川遊び兼食料調達の魚取り。夜空の下でいっぱいに飛び交う蛍の光。地域を挙げてのお祭り騒ぎ。

今は失われつつあるその物語だが、今でも人々の記憶の中には確に残っている。嬉しそうに語られる方々の笑顔を私はいつまでも忘れることはないだろう。

新型コロナウイルスが世界を襲い、聞き取りをすることも困難になる中、わざわざプロジェクトをやらなくてもいいのではないかと考えたこともあった。しかし創作を続けるうちにこんな中だからこそ作ることに意味があるのだと気付いた。なぜ、この龍門に寿長生の郷ができたのか。なぜ、こんな不便な山の中に本社があるのか。創作するにあたってこの地域のことを紐解いていく内にそういうことさえもだんだんわかってきた。ここ以外に



上 如龍が滝のふもとのお地藏さん
右 京都との境、下石川の水源如龍が滝



そ車が通れる道とは思えない道を無理矢理通っていき、ジェットコースターにも似たスリルをかれこれ30分くらい味わったのだろうか、ついに龍門の南端、川の向こう岸は京都という如龍が滝に到着した。そこで見たのは、思っていたよりも壮大で美しいものだった。

悠々と流れる水は命の源。水は天から降り注ぎこの滝から自然や生き物、人々へと行き渡り命を育む。西龍門では昔からこの水を田畑に使っており、地域の方々はこの地を大切に守ってきたのだそう。そんなここは水の神様である龍が住む神聖な地と考えられてきた。

龍門の大石川の水源にあるこの滝は2条になっており1つは高さ2メートル、幅3メートル。もう1つは高さ39メートル幅4メートル、滝が大きな岩石に触れてまるで隻龍が踊っているようである。『大石のあゆみ』より抜粋)

人目につかない山奥で今ではこの地を知る人もわずかなのだろうか、滝のふもとのお地藏さんは今でも綺麗に手入れされ、まだ新しいシキシがお供えしてあった。この地と共に人々の想いも一緒に消えていってしまうのかと思うと怖くなる。時代と共に消えつつあるそんな人た

も記憶絵に取り組まれている地域があるが、そのどことも違う、自然と人、生き物と農が織りなす里山。それがここならではの物語として、龍門にある。

長年叶匠壽庵が求める農工ひとつの理想郷は、実は昔の龍門、記憶絵の中にこそあるのではないだろうか。そしてそれはコロナ禍、コロナ後の未来への光になるのではないかと考えるようになった。訳もわからず飛び込んだこのプロジェクトだが、今では楽しく真剣に取り組んでいる。私自身は特に何かができるわけではないが、講師の河崎さんや、龍門にお住まいでプロの絵師でもある半田さんをはじめ地域の方々にはいつも助けられており、改めてこのプロジェクトは皆さんの協力なしでは絶対に成り立たないものだと思付かされる。

会社、大学、地域とたくさんの方の協力を得て、まさに地域一体となって共に創り上げるそれはもはやただの絵屏風ではない。今は失われた昔の風景を学び、今、そして未来を考える。ふるさと絵屏風とはそういうものなのではないだろうか。

来年の春を目標に完成を目指しており、今からその活用方法について考えていくのが楽しみである。



地上の稲を結実させる稲妻（夫）。それは、豊穰をもたらせるものでもあります。自然が織りなすこの世界を、人は鋤・鍬をもって耕し、新しい道を切り開くために創造力を働かせます。叶匠壽庵人は「農工ひとつ」を合言葉に、百姓（おおみたから）として菓子づくりに接し、先を見据えたモノづくりを考えます。この印は1つひとつの命を大切に、その持つ力を最大に発揮させ、生かしていく能力を拓いていくという意志を表現しています。

写真撮影 谷口菜穂子



いよいよ盛夏へと向かう装いが、私たちの住まう寿長生の郷でも感じられる季節になりました。梅雨の時期が終わると池には蓮の葉が現れます。日毎にそれは大きくなり茎と共に成長していきます。水面から天に向かって伸びる蕾もふくらみはじめ、毎朝の山歩きの楽しみのひとつとなります。今日は一輪開花したと、しばし足を止めて見入ってしまいます。なんとも言えない美しい姿は、自らの振舞いを省みる時間を与えてくれます。そんな想いを砂糖菓子に投影してみました。

叶匠